史記九

（列伝二）

新釈漢文

史記

九

（列伝二）

水沢利忠著

新釈漢文大系 89

明治書院

定価 6,600 円（本体 6,408 円）

平成５年５月20日　初 版 印 刷
平成５年５月25日　初 版 発 行

著　者　水沢利忠（みずさわ としただ）
発行者　三樹　彰
印刷者　田中　忠
発行所　株式会社 明治書院

新釈漢文大系
第　89　巻
史記九（列伝二）

東京都千代田区神田錦町1-16
郵便番号１０１
電話　03（3292）3741（代）
振替口座 東京３-４９９１番

© 水沢利忠 1993

大日本法令印刷・星共社製本
ISBN4-625-57089-1

例言

一、例言の詳細は、『史記一（本紀上）』に収めたので、ここでは本書に関した必須の事項のみを略叙した。

一、本書は、『史記』十二冊中の『史記九（列伝二）』である。

一、本書は、本大系の執筆要旨で項目を設けたが、校異は語釈の部に入れ、すべて簡要を旨とした。

一、原文を数節または数十節に切って、番号を付したのは、参照の便と、長文を扱い易くせんがためである。

一、通釈は意訳を避け、平易な直訳を旨としたのは、原文を読み、通釈を併読することによって、直ちに本旨を了解し、名文『史記』原典の妙味の鑑賞に便せんがためである。

一、本書は、滝川亀太郎博士著の『史記会注考証』を底本とし、その底本となった同治九年張文虎刊『金陵書局本』及び同治十一年張文虎校刊『史記集解索隠正義札記』と、明治十六年刊有井範平の補標『史記評林』、上海図書集成印書局校印の乾隆十二年版勅校刻二十一史の『欽定史記』、一九五九年七月中華書局刊の『史記』、拙著『史記会注考証校補』などを併せて校訂した。訳出に参考した主なるものは、滝川氏の『会注考証』を主とし、梁玉縄の『史記志疑』、岡白駒の『史記觸』、中井履軒（積徳）の『史記彫題』、箭内亙『国訳漢文大成史記列伝』、池田四郎次郎の『史記補注』、王叔岷氏の『史記斠証』など先人近人の業績を従とし、菊地三九郎氏の『史記国字解』、公田連太郎氏の国訳『史記』、平凡社版の『史記』（野口定男氏代表共訳）、筑

摩書房版の『史記』（小竹文夫・武夫氏共訳）、朝日新聞社中国古典選『史記』（一海知義・田中謙二氏訳）、岩波文庫版『史記列伝』（小川環樹・今鷹真・福島吉彦氏共訳）の現代語訳を参照した。書中の引用には、姓氏や書名のみを略記したのは、簡略を主旨としたためである。ここで改めて多くの先達の鴻業に敬意を捧げ、厚く謝意を表する次第である。

一、原文で増補または削除を必要とした場合は、原則として本文と書き下し文に、削除は（　）を、増補は〔　〕を付け、語釈でその説明をした。ただし、煩瑣になる場合は、語釈での説明のみとした。

一、地名は、文海出版社印行の劉君任著『中国地名大辞典』、竜門書店印行の銭穆著『史記地名考』、譚其驤主編『中国歴史地図集』（第一冊）を参照した。

一、『史記十二（列伝五）』の巻末に、列伝全文の索引を付して検索に便じた。

一、本書の訳業は、次の方々に各列伝を分担執筆して頂き、水沢がそれを監修した。以下の方々の原稿は水沢がその全体にわたり、目を通した。従って、文責は最終的には水沢が負うものであるが、また以下の方々との共同作業でもあり、ここにその方々の名前を記して深甚の謝意を表する。

孟子荀卿列伝第十四―平野和彦〔群馬女子短大専任講師〕　孟嘗君列伝第十五―中田伸一〔小山高専助教授〕　平原君虞卿列伝第十六―長瀬瑞己〔東京学芸大学付属大泉高校教諭〕　魏公子列伝第十七―佐藤一樹〔二松学舎大学専任講師〕　春申君列伝第十八―河内利治〔調布学園女子短大専任講師〕　范雎蔡沢列伝第十九―谷口匡〔下関市立大学専任講師〕　楽毅列伝第二十、李斯列伝第二十七―増野弘幸〔大妻女子大学専任講師〕　廉頗藺相如列伝第二十一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

―廣野行雄〔駿河台大学専任講師〕　田単列伝第二十二―岡本嘉之〔都立烏山工業高校教諭〕　魯仲連鄒陽列伝第二十三―加固理一郎〔筑波大学助手〕　屈原賈誼列伝第二十四―寺田正〔大阪府立生野高校教諭〕　呂不韋列伝第二十五―内村嘉秀〔国士館大学助教授〕　刺客列伝第二十六―吉原英夫〔東京高専助教授〕

一、『史記八（列伝一）』の例言には、明記しなかったが、『史記八（列伝一）』の原稿の整理・編集は、阿川修三氏〔文教大学専任講師〕が担当した。本書も、また阿川氏が前巻同様に担当した。また、埼玉短期大学の上田武先生には、一部の列伝の原稿に加筆して頂いた。また、筑波大学の中村俊也先生には分担者の紹介等でいろいろと御世話になった。ここに記して、深甚の謝意を表する。

一、本書の出版については、原稿の整理、校正など、明治書院の社長三樹達生氏はじめ、藪上信吾氏ら社員諸氏の労に負うところが多い。ここに記して深甚の謝意を表する。

平成四年七月

水澤利忠

史記九（列傳二）目次

孟子荀卿列傳第十四……一
孟嘗君列傳第十五……二〇
平原君虞卿列傳第十六……五二
魏公子列傳第十七……八四
春申君列傳第十八……一〇五
范雎蔡澤列傳第十九……一四〇
樂毅列傳第二十……二三九
廉頗藺相如列傳第二十一……二四六
田單列傳第二十二……二八〇
魯仲連鄒陽列傳第二十三……二九二
屈原賈誼列傳第二十四……三三六

呂不韋列傳第二十五……三六六
刺客列傳第二十六……三八七
李斯列傳第二十七……四五〇

孟子荀卿列傳第十四

解説　「太史公自序」に「儒家や墨家の残された文書を渉猟し、礼と義の大綱を明らかにして、（魏の）恵王の利益をのぞむ端を絶ちきり、すぎ去った世々の興亡を説きつらねた。ゆえに孟子・荀卿列伝第十四を作る」という。また、『会注考証』によれば、『桃源抄』に引く『蕉了自叙伝』は次のようにいう。「孔子春秋の教えは、厳刑苛法、縦横の説を経て、戦勝を利とし領地奪取を功とする思想へと変化した。そうした教義の変化を承けて再び堯・舜・周・孔の道を説くことができたのが、孟子が白起王翦の伝に続いた理由である」と。これらから、司馬遷の、孟子に対する評価を窺うことができよう。しかし、孟子の学説は、「迂遠で実際にそぐわないもの」として、結局（魏の）恵王にも受け入れられなかった。まさに時代が合従連衡を至上のこととしていたときのことである。荀卿もまた、濁世を批判し、儒教以外の異端の学が人心を乱すのを嘆き、儒家・墨家・道家の学説と政治の興亡を論じた。孟子と荀卿は、ともに孔子の学問に遡源して別派をなした思想家である。司馬遷は、この列伝において孟子と荀卿を孔門の分派たる思想家として対峙させたかったのであろう。しかし、『史記補注』に引く梁玉繩の説の如く、荀卿は孟子と並べるべきではないとする見方もある。

1 太史公曰、余讀孟子書、至梁惠王問何以利吾國、未嘗不廢書而歎也。曰、嗟乎、利誠亂之始也。夫子罕言利者、常防其原也。故曰、放於利而行多怨。自天子至於庶人、好利之弊、何以異哉。

太史公曰く、余、孟子の書を讀み、梁の惠王の何を以て吾が國を利せんとすると問ふに至りて、未だ嘗て書を廢して歎ぜずはあらず。曰く、嗟乎、利は誠に亂の始めなり。夫子罕に利を言へるは、常に其の原を防ぐなり。故に曰く、利に放りて行へば怨み多し、と。天子より庶人に至るまで、利を好むの弊、何を以てか異ならんや。

通釈　太子公曰く、私は孟子の書物を読んで、梁の恵王が（孟子に）、「何によって私の国を利してくださるのか」と問う場面に読み至るたびに、いつも書物を下に置いて嘆息したものである。「ああ、利というものは、確かに一切の争乱の始まりである。孔子が、まれにしか利について言わなかったのは、常に（乱の）みなもとを防いでいたのだ。だから、『利によりて行えば怨み多し』と言っている。そして、人類の、天子から庶民に至るまで、その利を好むという病弊に何の違いがあろうか」と。

語釈　○太史公曰　『史記』の列伝は、「太史公曰」以下の一段を篇末に置くのが通例であるが、本伝は冒頭に置かれている。詳節本は巻末に置く。○孟子　儒家経典の一つ。戦国時代中期、孟子とその門人万章・公孫丑らによって撰じられた。一説では、孟子の門人或いはその門人による記載ともいわれる。『漢書』芸文志には、『孟子』十一篇が著録されているが、現存するものは七篇である。孟子及びその門人の政治活動、政治、教育、哲学、倫理等の学説と思想が記載されている。南宋の朱熹は、『孟子』『論語』『大学』『中庸』を合わせて「四書」と称した。○梁恵王　魏の恵王のこと。○何以利吾国　『孟子』梁恵王上篇に見える。○未嘗不廃書而歎也　詳節本は、「書」を「巻」に作る。○夫子罕言利者　『論語』子罕篇に見える。夫子は、孔子のこと。○常防其原也　南化本は、「常」を「当」に作る。○放於利而行多怨　『論語』里仁篇に見える。孔安国は、「放は依なり」という。即ち、依拠すること。○庶人　もと農民をさしたが、後に広く庶民一般をさす。

2 孟軻騶人也。受業子思之門人。道既通、游事齊宣王。宣王不能用。適梁。梁恵王不果所言。則見以為迂遠而闊於事情。当是之時、秦用商君、富國彊兵、楚・魏用吳起、戰勝弱敵、齊威王・宣王用孫子・田忌之徒、而諸侯東面朝齊。天下方務於合從連衡、以攻伐為賢。而孟軻乃述唐・虞三代之德。是以所如者不合。退而

孟軻は、鄒の人なり。業を子思の門人に受く。道既に通じ、齊の宣王に游事す。宣王、用ふること能はず。梁に適く。梁の恵王、言ふ所を果たさず。則ち見て以為へらく、迂遠にして事情に闊し、と。是の時に当たり、秦は商君を用ひて、國を富ましし兵を彊くし、楚・魏は吳起を用ひ、戰ひ勝ちて敵を弱め、齊の威王・宣王は、孫子・田忌の徒を用ひ、而うして諸侯東面して齊に朝す。天下方に合從連衡を務め、攻伐を以て賢と為す。而るに孟軻は乃ち唐・虞三代の德を述ぶ。是を以て如く所の者合

與萬章之徒、序詩・書、述仲尼之意、作孟子七篇。

はず。退きて萬章の徒と、詩・書を序し、仲尼の意を述べ、孟子七篇を作る。

通釈 孟軻は鄒の人である。（孔子の孫）子思の門人から学問を受けた。彼は、（孔子の説く）道理に精通した後、国を出て斉の宣王に仕えたが、宣王が彼を用いることができなかったので、（魏の都）梁に行った。そして、梁の恵王は、彼の言うことを実行せず、迂遠で世の実情にはそぐわないものであると考えた。当時、秦は商君を用いて国を富ませ、兵力を増強していたし、楚・魏の両国は、（前後して）呉起を用い、戦い勝って敵を弱めており、斉の威王・宣王は、孫子や田忌らの人物を用いて、諸侯は東に向かって斉に朝貢していた。天下の諸侯は、或いは合従して秦にあたり、或いは連衡して秦に媚びることに熱中し、攻伐することを至高無上の事としていたのである。ところが、孟軻は、遙か昔、唐（堯）・虞（舜）及び（夏・殷・周）三代の仁政徳治について述べた。だから、ゆく先々で意見が合わず、重用されなかったのである。そこで、退いて、著述に専心して、弟子の方章らと共に『詩経』『書経』等を叙述し、孟子』一書、七篇を著したのである。

語釈 ○孟軻　孟子のこと。孟子は、名を軻といい、字は子輿という。○騶　地名。『評林』本は、「騶」を「鄒」に作る。『索隠』は、魯の地名で「邾」ともいうとするが、『考証』は、春秋時代の邾国で、後に「鄒」と改名したとする。ここは『考証』に従う。○受業弟子が師から学問を受けること。○子思　姓は孔、名は伋。孔子の孫（孔鯉の子）である。曾参の弟子と伝えられる。孔子の中庸思想を継承し、それを継承発展した孟子とともに思孟学派と称される。『漢書』芸文志諸子略には、『子思』二十三篇が著録されているが、既に佚している。現存する『礼記』中の、『中庸』『表記』『場記』は子思の著作と伝えられる。○受業子思之門人　孟子の学統については異説がある。南化本・紹本には「人」字がなく、『索隠』に引く王劭の説によっても、「人」字は衍字とされる。梁玉繩『史記志疑』、趙岐『孟子題辞』は、長じて孔子の孫子思を師とする、といい、『漢書』芸文志は、子思の弟子とする。即ち、孟軻は、孔伋（子思）の門において、つまり子思を師として学問を学んだとする説がそれである。『考証』によれば、伯魚（孔子の子孔鯉）は、孔子に五年先立って没し、その子である子思は八十二歳で没したが、孔子が没したとき十歳であった。即ち子思は威烈王十八年（前四〇八）に没したのである（一般には子思の没年は前四三一年）。赧王元年（前三一四）、斉が燕を伐ったとき、孟子はこれを見ており、それは子思の没後九十五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

年のことで、孟子の寿命が百余歳であったなら子思と接していたことになる。しかし、孟子はこれほど長寿ではなかったはずで、子思から学問を受けることはありえなかった。『考証』に引く中井積徳の説は、孔子が卒してから斉の宣王に至るまで百五十年の歳月があって、子思の寿命は百歳ということになり、また、孟子はまだ生まれておらず、子思と会う機会はなかったとする。ここは、原文どおり、孟子は子思の門人に学問を受けたとするべきであろう。○道既通　学問の道に精通すること。この場合、孔子の説いた道を理解体得したことをさす。○遊事　「遊」は遊説すること。「事」は事に服すことをいう。○斉宣王　田辟強。前三四二～前三二四年在位。○梁　魏の別称。魏の恵王は、安邑（今の山西省夏県の北）から大梁（今の河南省開封市）に遷都したので、魏は梁とも称される。○遊事斉宣王。宣王不能用。適梁　梁玉繩『史記志疑』の説によれば、孟子の遊歴について、『史記』は、斉が先で後に梁とし、趙岐『孟子注』、『風俗通義』窮通篇もこれに同じ。古史はこれに従うが年数が合わず、『資治通鑑』にいう、始め梁に遊び、後斉に仕えたとするのが正しいと見るべきであるとする。『考証』によれば、孟子が梁に遊んだのは、恵王後十五年、即ち周慎靚王元年。翌年恵王が卒し襄王が嗣位したが、孟子は襄王がともに為すに足らぬことを知り、梁を去って斉に遊んだとする。『補注』に引く中井履軒の説によれば、梁恵王の即位は、斉宣王即位の三十八年前で、孟子が先に梁におもむき、のち斉におもむくことはありえないという。○果　賛成する。信じる。○迂遠　曲がりくねって実際にそぐわないこと。○闊　大きくて空であること。○秦　戦国の七雄の一つ。○商君　姓は公孫、名を鞅という。衛国の人。秦の孝公が変法を実行するのを補佐し、秦国富国強兵の基礎を固めて、その功績により商（今の陝西省商県の東南）に封ぜられた。号は商君、商鞅とも称する。著に、『商君書』がある。詳しくは、「商君列伝」参照。○楚　戦国の七雄の一つ。詳しくは、「楚世家」参照。○魏　戦国の七雄の一つ。詳しくは、「魏世家」参照。○呉起　衛国左氏（今の山東省曹県の北）の人。魯の将、魏の将を任じた。後、楚において、為宛（今の河南省南陽）守、令尹を任じ、楚悼王の変法を補佐して、楚国の富強を促進した。詳しくは、「孫子呉起列伝」参照。○斉威王　田因斉。前三七八～前三四三年在位。○孫子　孫臏のこと。斉の国阿（今の山東省陽谷県の東北）の人。孫武の後代にあたる。斉の威王の軍師を任じ、魏の軍を桂陵と馬陵において破って、その名を天下に顕した。著に『孫臏兵法』がある。詳しくは、「孫子呉起列伝」参照。○田忌　斉の将。二度にわたって魏の軍を破った。○東面　東の方を向くこと。○朝　朝拝すること。○合従連衡　合従は、合縦ともいい、南北を合わせる意。六国（韓・魏・趙・燕・楚・斉）が連合して秦に抵抗した組織的策略をさす。蘇秦が唱えた。連衡は、連横ともいい、東の六国を西の秦に服従せしめんとした政策。張儀が唱えた。○唐・虞三代　唐は、陶唐氏。平陽（今の山西省臨汾市の西南）に居り、堯がその指導者であった。虞は、有虞氏。蒲阪（今の山西省永済県の西）に居り、舜がその指導者であった。堯・舜については、「五帝本紀」参照。三代は、夏・殷・周の三王朝をさす。○所如者不合　孟軻の主張と、彼が遊

説した国々の実情が合わなかったことをいう。○万章之徒　万章、姓は万、名は章、斉の人。孟子の弟子。『索隠』『正義』ともに、孟子には公明高という門人があったとするが、中井積徳は、公明高は孟子の門人ではないとする。○詩　『詩経』のこと。中国最古の詩集で、儒家経典の一つ。○書　『尚書』、『書経』のこと。中国上古の歴史文献で、儒家経典の一つ。○序詩・書　序は順序だてる意。『史記志疑』は、七篇中、『書』についていうものは二十九、『詩』を引くものは三十五であるのでこのようにいうとする。また、『孟子』注には、孟子は五経をいったが、最も『詩』『書』に長じたという。○作孟子七篇　『隋書』経籍志は『孟子』十四巻、趙岐注は七巻、劉熙注は九巻とする。

3 其後有騶子之屬。齊有三騶子。其前騶忌、以鼓琴干威王。因及國政、封爲成侯、受相印。先孟子。其次騶衍、後孟子。騶衍睹有國者益淫侈、不能尚德若大雅整之於身、施及黎庶矣。乃深觀陰陽消息、而作怪迂之變、終始大聖之篇、十餘萬言。其語閎大不經、必先驗小物、推而大之、至於無垠。先序今以上至黄帝。學者所共術、大竝世盛衰。因載其禨祥度制、推而遠之、至天地未生、窈冥不可考而原也。先列中國名山・大川・通谷・禽獸・水土所殖、物類所珍、因而推之、及海外人之所不能睹、稱引天地剖判以來、五德轉移、治各有宜、而符應若茲。

其の後、騶子の屬ひ有り。齊に三騶子有り。其の前の騶忌は、琴を鼓するを以て威王に干む。因りて國政に及び、封ぜられて成侯と爲りて、相の印を受く。孟子に先だてり。其の次の騶衍は、孟子に後る。騶衍國を有つ者益ゝ淫侈なるを睹、大雅の之を身に整へ、施いて黎庶に及びたる若く、德を尚ぶこと能はず。乃ち深く陰陽の消息を觀て、怪迂の變、終始大聖の篇、十餘萬言を作る。其の語閎大不經にして、必ず先づ小物を驗へ、推して之を大にし、垠り無きに至る。先づ、今より以上黄帝に至るまでを序す。學者の共に術ぶる所にして、大いに世の盛衰を竝ぶ。因りて其の禨祥度制を載せ、推して之を遠くし、天地未だ生ぜず、窈冥にして考へて原ぬべからざるに至る。先づ中國の名山・大川・通谷・禽獸・水土の殖する所、物類の珍とする所を列し、因りて之を推して、海外の人の睹る能はざる所に及ぼし、天地剖判せし以來、五德轉移し、治各ゝ宜しき有りて、

以爲儒者所謂中國者、於天下乃八十一分居其一分耳。中國名曰赤縣神州。赤縣神州內、自有九州。禹之序九州是也。不得爲州數。中國外如赤縣神州者九。乃所謂九州也。於是有裨海環之。人民禽獸、莫能相通者。如一區中者、乃爲一州。如此者九。乃有大瀛海環其外。天地之際焉。其術皆此類也。然要其歸、必止乎仁義節儉、君臣上下、六親之施。始也濫耳。王侯大人、初見其術、懼然顧化。其後不能行之。

通釈　その後、騶子とよばれた人たちが出た。斉の国には、三人の騶子がいた。最初の騶忌であるが、彼は、琴を弾くことにかこつけて斉の威王に仕官を求め、それによって参政し、成侯に封ぜられて（斉国）宰相の印を受けた。孟子より以前のことであった。次の騶衍は、孟子の後である。騶衍は、当時の国を治める者たちが、ますます奢侈になるのをみてとり、（『詩経』）大雅篇に見えるように、「徳によって自らの身を整え、それを庶民に普及する」というように徳を尊ぶことができないと思った。そこで、深く陰陽の気の増減の理を探り、『怪迂の変』『終始大聖』の諸篇十余万言を著した。彼の理論は、非常に遠大で実際にそぐわず、往々にして先ず小さな事物を証拠とし、それを推し広めて広大な事物として、さらに無限大の事物にまで達するのである。まず、当時から説きおこし黄帝の世にまで溯る。それは、学者たちが一致して説くところであり、さらに世の盛衰の大体を論じ、それを遠く推し広めて、天地の生ずる以前、暗黒でたずねることができないところにまで達する。また、中国の名山、大川、通谷、禽獣、水産に繁

符應茲くの若きを稱引す。以爲く、儒者の所謂中國は、天下に於て乃ち八十一分して其の一分に居るのみ。中國をば名づけて赤縣神州と曰ふ。赤縣神州の內、自ら九州有り。禹の序する九州是れなり。州の數と爲すを得ず。中國の外に赤縣神州の如き者、九あり。乃ち所謂九州なり。是に於て裨海有りて之を環る。人民禽獸、能く相通ずる者莫し。一區の中の如き者、乃ち一州と爲す。此くの如き者九あり。乃ち大瀛海有りて其の外を環る。天地の際なり、と。其の術ぶるところは皆此の類なり。然れども其の歸を要するに、必ず仁義節儉、君臣上下、六親の施に止まる。始めや濫なるのみ。王侯大人、初め其の術を見、懼然として顧つて化す。其の後、之を行ふこと能はず。

殖する物、珍奇な物質をならべ、それを推し広めて、海外にある、人間には見ることのできない物にまで及ぼし、天地が分かれて以来の（木・火・土・金・水の）五徳の転移によって、各々しかるべき政治制度があり、天が下す瑞祥がそれら人事に相応ずることを説いた。彼の考えでは、一般の儒者がいう中国とは、ただ天下の八十分の一の大きさにしか過ぎない。中国は、赤県神州とよび、赤県神州の内にはそれ自ら九州がある。以前禹が画した九州がそれである。これは、彼がいう「州」の数には入らない。中国の他に、赤県神州のようなものが九つあって、これこそが彼のいういわゆる九州である。そこには、小さい海がまわりを取りまいていて、各州の人民や禽獣は皆互いに往来することができず、一つの区域の中に独立するようなもの、これこそが一州である。このような州が九つある。そして、大海があってその外を取り巻いていて、そこが天地のきわめなのである。彼の述べるところは、みなこういった類のものである。しかし、その説の帰着するところを考えると、必ず仁義倹約、君臣上下、六親の間の行事にゆきつく。ただ、その説きはじめが非常に空漠としてつかみどころがないだけである。王侯大人は、初めて彼の学説を聞くと、驚きうろたえてその説に引き入れられてしまうが、やがて実行できなくなってしまう。

語釈　○騶子　「騶」は「鄒」に同じ。姓。慶本・中統本・毛本の諸本は、「騶」を「鄒」に作る。○三騶子　騶忌・騶衍・騶奭のこと。○騶忌　「田敬仲世家」威王の条に事跡が見え、騶忌子と呼ばれている。○干　仕えることを求めること。○騶衍　斉の人。陰陽家の代表的人物。「五徳終始」の説を提言し、春秋戦国時代に流行した五行説を、社会歴史の盛衰興亡と王朝交替に附会した。○睹　見ること。『評林』では、「睹」を「覩」に作る。○淫侈　淫靡で奢侈なこと。○大雅整之於身　『詩経』大雅、思斉篇に見える。『詩経』の原文は、「刑于寡妻、至于兄弟、以御于家邦」であり、周の文王を讃えた言葉と解される。本列伝では「整之於身、施及黎庶」とし、原文を引いていない。「整之於身」は、徳によって自らの身を整えること。「黎庶」は、庶民のこと。○陰陽　原義はそれぞれの旁にあり、日の光り輝くさまを陽といい、暗く曇るさまを陰といった。陰陽説は、孔子・孟子より後に形成され、自然界の二つの対立と互いに消長しあう物質の力量を解釈した。ここでいう陰陽は、既に天人感応説と結合した概念になっている。○消息　「消」は滅亡、消滅、「息」は生長、増長の意。○作怪迂之変、終始大聖之篇　この二書は共に騶子の書の篇名。騶衍の著書について、『漢書』芸文志は、陰陽家鄒子四十九篇とし、注は鄒子終始五十六篇とする。『七略』にいう鄒子二種合わせて百条とはこれである。『封禅書』に、斉威王の時、騶子の徒が、終始五徳の運を論著したとあるが、これが『終始大聖之篇』である。『考証』は、鄒子の二書は佚したが、馬国翰に輯本があるという。○閎

大不経　広大、遠大で、実際にそぐわないこと。○必先験小物、推而大之　初めに小さいものを説いてこれを徴験とし、それより推して拡大し、無限大にまで説き及ぶこと。○無垠　際限がないこと。○黄帝　中国古代伝説上の帝王で、中原各族の共同の祖先。三皇五帝の一人。老荘学派、道教の始祖といわれる。「五帝本紀」には、姓は公孫、名は軒轅という。○術　『考証』は、「術」は「述」に通ずるとする。○大並　『史記志疑』は、「大」を「及」とし、方苞は、「大」は「及」に作るべきで、伝写の誤りであるという。つまり、先ず戦国について述べ、黄帝の事跡に至るまでは、学者の共通して述べるところで、衍はここからさらに世の盛衰にまで述べ及ぶという意に解す。中井積徳は、「大並」の「大」は、おおよそ、大概の意とする。『考証』は中井説を取っている。○禨祥　吉凶の前兆をいう。ここでは、陰陽家が虚構した歴史循環論に基づいて、政治上に五行配列を適応するため、相応する制度を具体的に定めたことをさす。○度制　政令法典のこと。○窈冥　深遠で暗黒であること。○通谷　深い谷。○殖　繁殖すること。○珍　珍奇なもの。○海外　遙かに遠い異域をさす。○称引　引き合いに出すこと。○天地剖判　かつて天地は混沌とした物質であったが、後、天と地の二つに分かれたことをいう。○五徳転移　木・火・土・金・水の五行の徳に従って変化すること。○符応若茲　「符応」は、天がくだす符瑞（吉兆）。それが、人事と相応ずることをいう。「若茲」は、このようであること。○赤県神州　中国の別称。これは、騶衍の説に基づくもの。○禹　伝説上、夏王朝の始祖とされる。堯・舜に仕え、舜の命によって、洪水を治めた功績からその位を譲り受けた。姓は姒、名は文命。詳しくは、「夏本紀」参照。○序　秩序だてて分けること。○九州　伝説上の中国の行政区分。『書経』禹貢によれば、九州とは、冀・兗・青・徐・揚・荆・豫・梁・雍の九つ。○中国外如赤県神州者九　『補注』は、「九」は「八」に作るべきで、中国と合わせて九つとすべきであるという。ここは、やはり『補注』に従うべきところであろう。○裨海　小さい海。○環　まわりをめぐる。○大瀛海　大きい海。○際　限界。○要考究すること。○帰　帰宿すること。○六親　六種の親族。古説は一致していない。『老子』王弼注、父母兄弟妻子とし、『正義』は、外祖父母、妻母、姨妹の子、兄弟の子、従子、女の子をさすという。通常、父、母、兄、弟、夫、婦（或いは養子）を六親とする。○濫空漠としてつかみどころがない。○王侯大人　『評林』では、「侯」を「公」に作る。○懼然　驚きうろたえるようす。「懼」は「瞿」に通ず。○顧化　その説に引き入れられること。

4 是以騶子重於齊。適梁。恵王郊迎執賓主之禮。適趙。平原君側行襒席。如燕。昭王擁彗先驅、請列弟子之座而受業、

是を以て騶子齊に重んぜらる。梁に適く。恵王郊迎して賓主の禮を執る。趙に適く。平原君側行して席を襒ふ。燕に如く。昭王彗を擁して先驅し、弟子の座に列して業を受くるを請ひ、碣石

築碣石宮、身親往師之。作主運。其游諸侯見尊禮如此。豈與仲尼菜色陳・蔡、孟軻困於齊・梁同乎哉。故武王以仁義伐紂而王、伯夷餓不食周粟。衛靈公問陳、而孔子不荅。梁惠王謀欲攻趙、孟軻稱大王去邠。此豈有意阿世俗苟合而已哉。持方枘欲内圜鑿、其能入乎。或曰、伊尹負鼎而勉湯以王、百里奚飯牛車下、而繆公用霸。作先合、然後引之大道。騶衍其言雖不軌、儻亦有牛鼎之意乎。

通釈 だから、騶子は、斉の国で非常に重視され、梁におもむくや、恵王は親しく自ら城外に至り、賓主の礼で彼を迎えた。趙に行くと、平原君は体をかがめながら前に出て導き、そして、着物の袖で彼のために椅子を拭き、非常にうやうやしく彼を迎えた。燕に出かけると、昭王は手にほうきを持って先導した。そして、自ら門下の弟子の椅子に並んで教えを受けることを願い、彼のために碣石宮を建築して師となし、自ら通って学んだのである。ここで彼は「主運」篇を著した。騶衍は、諸侯を遊歴してこんなにも礼遇をうけたのである。孔子が陳・蔡に囲まれ、糧を絶たれて憔悴し、孟軻が斉・梁で苦難を受けたこととはまるで違っていた。だから、（周の）武王は仁義によって紂を討ち王となったが、伯夷は、餓死しても周王朝の米粟は食べず、衛の霊公が（孔子に）戦陣の法を尋ねたが、孔子は拒んで答えず、梁の恵王が趙の国を攻めようと謀り、孟軻は（周の）大王が（夷狄を避けて）邠を離れた故事を引き合いに出した。これらは、世俗に迎合し人のきげんをとるだけを目的としたであろうか。四角いほぞを手に持って丸い穴の中に入れようとしても入るものであろう

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com